

〈帰郷〉 出来なかつた引揚者をめぐって

——安部公房『開拓村』論——

坂 堅 太

安部公房とラジオドラマ

ラジオドラマ『開拓村』は、一九五五年九月八日、一〇月一三日、十一月一日のそれぞれ午後一時五分〜二時、NHK第一「婦人の時間」番組枠にて放送された（作〓安部公房、演出〓小島凡子、音楽〓横田昌久、アンサンブル・フリージャほか。出演〓村上冬樹、栗山郁子、松宮五郎ほか）。初回放送日の『朝日新聞』（一九五五年九月八日）朝刊ラジオ面の番組紹介記事は次のようなものである。

安部公房作の三部作を三回にわたって放送する。開拓村に入った人々は、土地を得るためには地主の私有地払い下げと水の獲得に必死の闘争をしなければならない。目的遂行の途中乏しい食糧に耐えられず逃げ出したり、子供が死ん

だり、重労働の疲労で病気になったり、様々の辛苦をなめる。⁽¹⁾

この作品以前に安部は『社会の表情 人間を喰う神様』（一九五四年三月六日、文化放送）、『闖入者』（一九五五年七月二日、朝日放送）という二本のラジオドラマを手掛けており、安部にとつて『開拓村』は三本目のラジオドラマとなる。ただし、『人間を喰う神様』は劇要素の極めて少ない録音ルポに近いものであったこと、また『闖入者』は既発表の小説（『闖入者』『新潮』一九五一年一月）の翻案であり、しかもこれは沼田幸二との共同執筆だったことを考えれば、オリジナルのドラマ作品といえる。映画シナリオ『壁あつき部屋』（一九五三年）の執筆以降、演劇、ラジオドラマ、テレビドラマ、ミュージカルなど、安部がメディア横断的な創作を展開していったことはよく知られて

いる。こうした背景には、同時代の多くの文学者とも共有していた芸術大衆化に対する期待があったのだが、特にラジオというメディアは、その大衆的特性を考えたも、非常に重要な創作の場であったと考えられる。

日本におけるラジオ放送が本格的に開始されたのは一九二五年だが、世帯への普及率は放送開始七年目の一九三二年に漸く一〇パーセントを越えた程度であり、その伸び率は年平均約一・五パーセントほどであった。しかし一九三七年に日中戦争が始まると、ラジオの家庭への普及は急速に進展し、一九四四年までの年平均伸び率は約三パーセントを越え、一九四四年度末には普及率五〇・四パーセント、契約数は約七五〇万件におよんだ。その後戦災により一時的に普及率は下がるものの、一九四九年度末には再び普及率が五〇パーセントを越えることとなり、一九五五年度末には普及率七三・八パーセント、契約件数は約一三二五万件を記録している²⁾。

このように戦時期・戦後を通じて大半の家庭に普及したことで、ラジオというメディアは「大衆とともに笑い、怒り、かんがえて行く社会の強力な機関の一つ³⁾」として捉えられることとなり、その大衆性に対する期待が語られるようになる。劇作家である内村直也は、ラジオは文学や絵画のような高級な芸術にはなりえないという批判に反論し、「媒体芸術」と「生の芸術」という語を用いながら、ラジオ（及び放送メディア一般）の可能性について次のように書いている。

媒体芸術には、媒体芸術としての使命があります。それは、芸術を大衆の中に滲透させるという大きな使命です。生の芸術は如何にその純粋性を誇っても、民衆の中に滲透するという点では、到底媒体芸術にはかないません。今日から明日につながる芸術というものは、世界の隅々にまで行きわたって鑑賞されなければなりません。そのためには、なんといつても媒体芸術が重大な責任を負わされることとなります⁴⁾。

一度に大量の聴衆・観衆へと作品を届けることのできるラジオなどの放送メディアには「芸術を大衆の中に滲透させる」力が備わっており、それは一回性を基本とする「生の芸術」では考えもつかないような速度で（受容層の拡大という意味での）芸術の大衆化を進展させる。勿論、「世界の隅々にまで行きわたらせることだけが大衆化の尺度とはならないし、安部がそのように考えた、というわけでもない。この後、内村と安部はともにミュージカルの制作に取り組むが、東宝という大資本をバックにした内村に対し、安部が選んだのは大阪労音での公演『可愛い女』一九五九年八月二三日初演）だっただけを考えると、両者の間では「大衆化」の内実に対する相当な意見の相違があったことは間違いない。とはいえ、放送メディアのもつ大衆性に対する期待自体は共通していたであろう。

また、メディアの大衆性という点では、この『開拓村』が放送された「婦人の時間」という番組枠にも注目する必要がある。この番組は「占領期にCIEが、家庭に閉じ込められた個々の女性視聴者の眼を外に向けさせ、自らの権利と自由とを理解させる社会教育の一環として始めた⁽⁵⁾」ものであり、ニュースや時事問題についての解説・討論会の他に音楽や劇、録音ルポルタージュなどバラエティに富んだ構成で、一九四五年一〇月から六三年三月まで放送されていた。当初は三〇分番組であったのが人気に伴い五五分へと延長され、また、放送日も月曜く金曜の週五日であったのが、一九五四年からは一日延長され、月曜く土曜までの週六日になるなど、主婦層に高い人気を誇るプログラムであった。一九五三年に放送文化研究所が行った婦人番組意向調査では、「この番組から政治上、社会上の理解や知識を得た」と答えた「労務者の家庭婦人」は全聴取者の実に七八パーセントを占めたという⁽⁶⁾。戦犯問題と平和運動との接続を図った『壁あつき部屋』、松川事件の背後にある農村の貧困問題を指摘した映画シナリオ『不良少年』（一九五四年、家城巳代治監督による映画化が構想されたが実現はされず）など、この時期の安部は小説よりも広い受容層を期待できるメディアにおいてアクチュアルな創作を行っており、聴取者層や人気の高さを考えても、「婦人の時間」という番組枠はまさに格好の舞台であった。

『開拓村』は全三部のうち、第一・二部と第三部とでは舞台や

登場人物が異なっているため、実質的には二部構成の劇となっている。これに関係して、番組欄では第一・二部は「社会劇」と紹介されているのに対し、第三部は「ドキュメンタリー・ドラマ」と紹介されており、両者が質的に異なるドラマであることが示されている。前半の舞台となっていたのは「中部日本のある高原地帯」であり、かつては軍用地であったこの地に一九四七年、戦後開拓の一団が入植する。しかし地元の地主たちは彼らを受け入れるつもりはなく、団に用意されたのは水が出ない土地であった。第一部と第二部とでは、この開拓初期の苦勞が一九五五年の時点から回想的に語られており、その冒頭は以下のナレーションから始まる（『開拓村』本文の引用は全て『安部公房全集』第五巻、新潮社、一九九七年に拠る。以降、頁数だけを記す。なお引用内の「／」は改行を示す）。

開拓村は、まさにその名が示すように日本のヘキ地であり、隅っここの生活である。／しかしそれは生長しようとする日本の姿であり、生きようとする日本の素顔でもある。／だからここにはつねにその時々日本人の苦しみやよるこびが大きくうし出されているのだ。／食糧問題、失業、引揚者、人口問題、二三男対策、軍事基地……一つとして開拓とむすびつかぬものはない。開拓民の運命は、日本人の一人々々の運命と奥深くむすびびついているのである。／戦後十年……開拓村についても一つの歴史が語られる時がき

まず開拓村は「日本のへき地」「隅っこ」として位置づけられ、「食糧問題、失業、引揚者、人口問題、二三男対策、軍事基地」など、日本社会が抱え込む数々の矛盾の結節点として聴取者に印象づけられている。そして「戦後十年……開拓村についても一つの歴史が語られる時がきた」という言葉は、これまで開拓村の歴史が語られてこなかった、あるいは、語られない歴史があった、ということを示している。それでは、語られてこなかった開拓村の「戦後十年」の歴史とはいかなるものであったのか。それは他の「戦後十年」の歴史とどのように異なるのか。

本稿の目的は、『開拓村』の前半部分である第一部・第二部を分析することで、安部が描こうとした「戦後十年」とはいかなるものであったかを明らかにすることにある。その上で特に注目したいのが、作中に登場する開拓団が満洲からの引揚者を中心に結成されていること、つまり、開拓村の戦後十年とは、同時に引揚者たちの戦後十年でもあった、ということである。戦後開拓者たちを引揚者として捉えたとき、そこから見える「戦後十年」とは一体どのようなものであったのか。またそこで見出される問題は、引揚げという歴史的経験を語るうえでどのような意味を持つのか。

「帰郷」の物語について

「満洲からの引揚者を中心にした一団」(二〇五頁)と紹介されているように、作品に登場する開拓団員の多くは戦前の満洲開拓移民でもあり、団の中心人物である組合長の堀も満洲開拓を経験した人物と設定されている。これは戦後開拓の実情とも一致しており、一九四九年末時点で引揚げた旧満洲移民六万五二九六名のうち、約四割にあたる二万六四九九名が戦後開拓に参加している。⁽⁷⁾

日本の敗戦時、「外地」在住日本人の数はおよそ六六〇万人と推定されているが、その殆どは日本の敗戦とともに「内地」へと「帰還」することになり、一九四六年末までには約五〇〇万人が日本へと引揚げてきた。⁽⁸⁾一九五〇年前後にはこうした引揚げを体験した人びと、特に旧満洲地域からの引揚者による手記が相次いで世に出されることとなり、藤原てい『流れる星は生きている』(日比谷出版、一九四九年。これは三益愛子主演、小石栄一監督により映画化もなされた)、森文子『脱出行』(開顕社、一九四八年)、『秘録大東亜戦史 満洲篇』(富士書苑、一九五三年)などが刊行されている。「引揚げを体験するためには、(植民先の現地に)出かけるという行為が先行するが、敗戦後の引揚げを論ずるときには、その往還の「還」しか扱われないことが多い⁽⁹⁾」といわれるように、これらの手記においても敗戦以前⁽⁹⁾のことは殆ど記述されおらず、何故そこで敗戦を迎えることとなったのか、という問いは意識されていない。多くの手記は

一四五年八月のソ連軍侵攻前後から書き起こされており、飢えや寒さ、ソ連軍や「匪賊」による暴力など、引揚げの途上味わった困難、苦勞に大部分の記述が当てられている。そして最終的な目標として設定されているのが「祖国」日本への帰還である。

彼・彼女らが体験した暴力が過酷なものであればあるほど、「祖国」への切望は高められ、語られる引揚げは「帰郷」の物語として提示される。手記には引揚げの途上に起こった日本人集団内部の様々な諍いが記述されているが、こうした体験は「日本人」という共同性の無根拠さを暴露し、「民族」の枠組みを相対化しうるものである。しかし、その終点に「祖国」が置かれることにより、「本来はトランスナショナルであったはずの体験」は「ゴールとしての「日本」を目指す「帰郷」の物語としてナショナルな記述で覆」われてしまうことになった。⁽¹⁰⁾

この時期に生み出された引揚げを巡る語りの例として、ここでは藤原てい「呼べどこたえず」を取り上げたい。先に挙げた『秘録大東亜戦史』は、一九五四年には全六巻の改訂縮刷決定版が刊行されており、「呼べどこたえず」はその第二巻『満洲篇』に収められている。⁽¹¹⁾これは藤原自身の体験を綴ったものではなく、青森県庁開拓課などの資料協力のもとに開拓農民たちが辿った引揚げの過程を再構成したものであり、厳密な意味での手記とは言えない。しかしそうしたフィクショナルな手を加えられたものだからこそ、そこには当時の定型的な語りの形式が与えた影響を見て取ることもできる。

「呼べどこたえず」は黒河省遼克県双河鎮に入植した青森郷開拓団の引揚げを描いたものであり、その記述はやはりソ連軍参戦の前日から始められている。交通手段がなかったために徒歩での南下を余儀なくされた開拓団の人々は飢えや寒さ、そして現地人からの襲撃により次々と命を失い、四七一名いた団員も、ハルピンの日本人世話会に保護された時には一〇〇名足らずとなっていた。開拓団はその後新京の日本人収容所に移送され、そこで引揚船への乗船命令を待つことになる。いつ引揚げの目途が立つのかという不安を抱えながらも、なんとしても生きて帰るのだ、という決意を新たにすると、手記は閉じられるが、その結末部には以下のような団員たちの会話がある。

「総団長さん、おら今日、満人から、内地では二千万人の餓死者が出たって聞いたけど……」／「隅の方にいた女が乗り出していった。／「多分、デマでしょうがいずれにしろ、内地の生活が楽でない事だけは、たしかです」／「おら、今帰ったって困るなあ。もう少し、内地の生活が楽になるまで、ここで働いていたほうがいいかな」／「何いつてるだ。馬鹿だなあ、発疹チフスにでもなったらどうする。おらどんな事をしたって内地へ早く帰りたい」／「そうだ、そうだ。一日も早く帰えらなければあ。おら、二千万人中へ入って餓死したっていいよう」⁽¹²⁾

二千万人の中へ入って餓死したつていい」という団員の言葉は、引揚者たちにとって「内地」＝祖国が生死を超越したところに存在していることを意味する。彼・彼女らは生き延びるために「内地」を目指すのではない。たとえその先に死が待っているとしても、そこに帰らずにはいられないものとして「内地」＝祖国は捉えられており、その思いだけが団員たちの生を支えたのだった。これらの手記に綴られた「帰郷」の物語は「日本人」、「日本国民」という枠組みを自明のものとして強化すると同時に、「大日本帝国」の記憶を後景に退かせてしまう。何故彼らは敗戦を「内地」ではない地域で迎えることになったのか、という問いはなされず、「大日本帝国」と「日本国」の違いを無視する形で「帰郷」だけがクローズアップされている。

また、こうした物語に対応するかのように、引揚者たちを「内地」で迎え入れる立場からも、「日本国民」の「帰郷」という定型を強化する言説が生み出された。東京都在外同胞帰還促進留守家族連盟が編纂した『引揚者 留守家族のための生活読本』（東京都在外同胞帰還促進留守家族連盟、一九五〇年）の冒頭に置かれた「引揚者の方々のために」は、以下のように呼びかけている。

引揚者の皆様永い間ほんとうに御苦労様でした。私達日本国民の身替りとなつて、異国での五年有余の抑留生活は国内の人々が到底想像だに出来ない辛苦が伴っていたことであろうことを思うと、自ら頭の下る思いが致しますと同

時に、あらゆる辛酸に打勝つて晴れて祖国の土を踏まれた皆様方に心からなるお喜びを申し上げるものであります。（中略）武器を捨てた平和と日本再建は、自由と民主主義によつてあらたなよそおいおこらして、世界の平和へと大きな希望をかけて進んでいます。この八千万国民のまごころかなつた平和と国家建設への進軍は、皆様方の参列をどんなに力強く喜んで迎へていふことでしょうか。（中略）さあ、引揚者の皆さん、明日といわずに今日只今から新しい平和と日本再建のために、民主日本建設のために力強い前進を開始いたしましょう。¹³

ここでも、引揚者たちの苦難が何故生まれたのかは問われることはなく、「私達日本国民の身替り」というように、引揚者たちの悲劇は戦後「日本国民」の物語へと組み込まれることになる。引揚者たちを「晴れて祖国の土を踏まれた」人々として歓迎し、「民主日本建設」に突き進む「八千万国民」の一員へと組み入れることで、戦後「日本国」の復興の物語が作り上げられていく。このようにナショナルな感情を強烈に喚起する言葉で彩られた「帰郷」の物語が、一九五〇年代半ばには定型的な引揚げの語りとして定着することとなった。

しかし、「祖国」への帰還をゴールとする「帰郷」の物語では、その後、つまり「帰郷」後に「内地」で営まれた引揚者たちの「戦後」が視野の外に置かれてしまう。果して引揚者たちは「平

和国家建設への進軍」にスムーズに「参列」することが許されたのか、「帰郷」の後に続く「戦後」を引揚者たちはどう生きたのか。その意味で、引揚げの過程ではなく、彼彼女らの「戦後十年」を描こうとした『開拓村』は、既存の引揚げ物語が取りこぼしてしまつたものを問うた作品として捉えることができ。また、「一九五〇年前後に、引揚げの経験を公刊できた人びとは、何よりも、時間的・経済的にゆとりのある階層」「書く」という行為に抵抗が少ない階層¹⁴⁾に限られていたことにも注意しなければならない。では、「帰郷」の物語が生み出した定型的引揚者イメージ(と、それを利用した戦後の「日本国民」意識醸成の戦略)に対し、『開拓村』が描き出したものはどのような関係にあつたのか。

〈帰るべき郷〉を持たない人々

『開拓村』に描かれている人々は戦前・戦後と二度の開拓を経験している。作中の会話から、その歴史を再構成すると、彼女らが満洲開拓に旅立つたのは一九三七年であり、敗戦と引揚げを体験したのち、戦後開拓へと向かったのは一九四七年となつている。この一九三七年と一九四七年というのは、戦前・戦後の開拓における一つの転換となつた年でもあつた。

戦前の満洲移民事業は一九三二年の満洲国成立の時期に始まり、一九四五年までの一四年間で約二七万人を農業移民として

送出しているが、開始当初は応募資格が在郷軍人に限られるなどの限定的・試験的なものにとどまつていた。しかし一九三六年、広田弘毅内閣の成立に伴い掲げられた七大国策の一つに満洲移民が位置づけられたことで、事業は本格的な国策移民へとその性格を変えることになる。同年八月には「二十ヶ年百万戸送出計画」が発表されているが、一九三七年はこの計画の実施初年度であり、いわば国策移民元年と呼べる時期にあたる。同年五月に出された『満洲移民第一期計画実施要領』では、その目的と対象者についてこう書かれている。

日滿不可分關係ヲ實質的ニ強化シ滿洲國ヲシテ健全ナル
發達ヲ遂ゲシムル為メニハ多数ノ日本人移民ヲ送出シ同國
ノ産業文化ノ開發ニ資スルト共ニ五族協和ノ理想ヲ顕現セ
シムルコトハ我對滿政策ニ最モ重要ナル事項ナルトコロ翻
ツテ我國ノ実情ニ鑑ミルニ人口ノ増加年々百万人ニ及ビ資
源ノ之ニ伴ハザルモノアルノミナラズ農村ノ情勢亦匡救ヲ
要スルノ実情ナルヲ以テ對滿大量移民ノ送出ハ現下ノ状態
ニ照シ最モ緊要ナル事項ナリトス¹⁵⁾

農業集団移民ノ募集ニ付テハ差当リテハ内地農村ノ実情
ニ鑑ミ成ル可ク東北ソノ他ノ窮乏之地ニ重点ヲ置クモ特殊ノ
府県ヲ除キ全国各府県ヨリ之ヲ募集セントス而シテ之ガ実
行ニ当リテハ農林省ト連絡ヲ保チ經濟更生指定村ヲシテ順

次土地ト人口トノ調和ヲ考慮シタル農村経済更生計画ヲ樹立セシメ成ル可ク耕地ノ狭小ナル地方ヨリ多数ニ募集スルモノトシ尚ホ同一地方出身者ヲ以テ成ル可ク一移住村ヲ構成セシムル様考慮スルモノトス¹⁷⁾

満洲移民政策は「人口ノ増加年々百万人ニ及ビ資源ノ之ニ伴ハザル」、「農村ノ情勢亦匡救ヲ要スルノ実情ナル」という国内矛盾を解決するための方策として構想されたものであり、送出の対象が「成ル可ク耕地ノ狭小ナル地方ヨリ多数ニ募集」されていることから明らかなように、過剰人口問題対策という側面も持ち合わせていた。そして日中戦争が開始すると、この移民事業は「満洲国の支配や対ソ作戦上の後尾兵力としての側面」が強調されることになり、「満洲移民も、日本帝国の国益を守るための国策推進者と位置づけられ」ていった。¹⁸⁾

一方、一九四七年という年も戦後開拓の一大転換点にあたる。戦後開拓は一九四五年一〇月二六日、農林省内に開拓局が設置されたことから出発している。これを職掌機関として一月九日、「緊急開拓事業実施要領」が閣議決定された。

終戦後ノ食糧事情及復員ニ伴フ新農村建設ノ要請ニ即応シ大規模ナル開墾、干拓及土地改良事業ヲ実施シ以テ食糧ノ自給化ヲ図ルト共ニ離職セル工員、軍人其他ノ者ノ帰農ヲ促進セントス。¹⁹⁾

「食糧ノ自給化」だけでなく「離職セル工員、軍人其他ノ者ノ帰農ヲ促進」することが目的に挙げられているように、戦後開拓は復員者・引揚者により増大した内地の人口問題対策という性格も帯びていた。そしてこの実施要領に基づき、戦前に作られていた食糧増産隊が、一九四六年、開拓増産隊へと改称される。「昭和二十一年度開拓増産隊実施要綱」の「趣旨」はこう説明されている。

農家2、3男、復員者、戦災者等ノ中、開拓興國ノ熱誠ニ燃ユル青壯年ヲ結集シテ隊ヲ編成シ開墾干拓大規模土地改良等ニ挺身セシメ併せて其ノ実践ヲ通ジテ開拓農民タルニ必須ノ精神技術ヲ体得セシメ隊期間満了後開拓地ニ入植新農村ノ建設ニ当ラシメ以テ開拓国策ノ完遂、食糧増産ノ達成ニ寄与シ日本再建ノ基盤ヲ確立セントス。²⁰⁾

対象とされているのが「農家2、3男、復員者、戦災者」、つまり国内に土地を持たない人々であることにも、この政策が単に「食糧増産ノ達成」だけを目的としたものではないことが示されている。「過剰人口に農地を与え、食糧を生産すること」で、人口問題と食糧問題（さらには治安問題）を同時に「解決」しようとしたのが戦後の緊急開拓であった²¹⁾。ただし、農業適地の判断が杜撰であったことや参加者の多数が農業未経験

者だったこともあり、緊急開拓は事業としては失敗し、その拙速な点は「緊急開拓の施策は、それこそ棄民政策そのもの」と評されている。⁽²²⁾

しかし敗戦直後の混乱が徐々に収まり、社会状況が安定を回復していくにつれ、開拓の性格も変更されていった。一九四七年一〇月二四日、緊急開拓事業実施要領は改訂され、「緊急」の二文字が外された「開拓事業実施要領」となる。その「方針」は以下のように書かれている。

国土資源の合理的開発の見地から開拓事業を強力に推進して、土地の農業上の利用の増進と、人口収容力の安定的増大を図り、以て新農村の建設に寄与することを目的とする。⁽²³⁾

それまでは「戦災者」など対象を規定する文言があつたが、改訂後の要領にはそうした記述は見当たらない。この時点で開拓の性格は転換し、「難民処理や失業対策としての開拓」から「食糧を生産するための開拓へ」シフトしたのである。⁽²⁴⁾ 杜撰だった入植者の選定は厳格化され、人口問題対策としての側面は後景化することとなった。

大半が農業未経験者である『開拓村』の人々はこの転換がなされる直前、つまり緊急開拓期の最終盤に入植したと考えられる。引揚げの先に待っていたものが緊急開拓であつたというこ

とは、結局「祖国」は彼・彼女らに居場所を与えることはなかったことを示している。戦前に過剰人口として「内地」から送出された人々は、ここで再度「棄民」の経験を味わうことになつた。どれほど井戸を掘っても水が出ないことにいら立ち開拓地を去ることを考えた団員に対し、組合長の堀は「私たちはみんな、生きるか死ぬかでやって来たんだよ。こうしたなきや、生きていけなかつたんだ：これでも、いちばん確かな道だつたんだよ」(二九四頁)と諭しているが、これは引揚げた先の「祖国」が、団員にとつていかに冷淡なものであつたかを物語っている。

そもそも、「多くの満州移民は、出稼ぎではなく骨を埋めるつもりで、全財産を処分して満州に移住していたので、引き揚げて帰るべき家もなく耕すべき田畑もなかつた」⁽²⁵⁾ 以上、その引揚げは「帰郷」とはなりえない場合が多かつた。旧満州移民の約四割が戦後開拓に赴いたという事実は、そうした事情を端的に物語っており、住むべき場所を与えられなかつた彼らは「ヘキ地」「隅っこ」にて戦後を過ごすこととなつたのである。こうした人々の存在は、当時支配的であつた「帰郷」の物語が演出する「日本国民」による「民主日本建設」という公的な「戦後」を拒否し、それが覆い隠そうとする「日本国民」間の亀裂、裂け目を顕示する。入植先の地元農民たちが開拓団員に対する姿勢はその象徴であらう。

満洲帰りに東京の食いっぱぐれだちうじやないか。おまけ

に半分方、しろうとだちうことだ。薄っぺれえ手の皮で、百姓ができるくれえなら、なんでわしらが腰まげて歩くことありますかね。(二九二頁)

わしは、ああいいう流れもんが村に入ってくるんがすかんのじゃ。(中略) わしらは、立場上な、村の平和ちうことを、第一に考えんといかんのじゃ、町から来た連中は、気がすさんどるでなア……(三〇一頁)

村の人間たちは開拓団を同じ「国民」として受け入れることはなく、それどころか「村の平和」を乱しかねない異質な他者として排除しようとする。開拓団の人々は(帰るべき郷)を持たなかつたために「へき地」へと送り込まれながら、そこでも「満洲帰り」「流れもん」として差別・排除されてしまう。農家の子供たちからも「開拓乞食」として嘲笑されてしまうなど、開拓者⇨引揚者たちは戦前・戦後を通じて日本社会から疎外され続ける存在として描かれている。

こうして『開拓村』では、「帰郷」の物語に回収されずに「へき地」へと周縁化され、「民主日本建設」の「戦後」からは排除されてしまう引揚者たちの姿が捉えられているのだが、作中には、彼ら同様、定着すべき土地を持たず、「民主日本建設」の「戦後」からも取り残された人々が登場している。それが農家の二、三男から構成された青年会である。農村の二、三男たち

は戦前から過剰人口層として問題視されていたが、敗戦後は軍の解体、都市産業の潰滅等によって多くの人口が農村に還流したために、状況はさらに悪化することとなった。⁽²⁶⁾

村中で土地に困つとるんじゃねエか。親方どもにそんな仏心がありや、山なんぞとつくに開放されとるわ。開拓の連中が入るまえじやつたが、青年会で二三男対策の問題が出てよ、おれが代表で山の開放を役場に持ちこんだらよ、親方ども何んちゆつたと思うね。アカじゃ、とこう言いおつた。(三一二頁)

自らの土地を持つことを許されなかつた彼らは、未耕作地の解放という正当な要求でさえも「アカ」として拒絶される。「こ」の中では希望も愛情も信頼も引き裂かれ、養分を吸いとられてただボスたちとボスでないものという関係だけが、図太く生きのびていく(三二〇頁)というように、敗戦後の民主化改革の影響を受けることなく、旧来の封建的権力構造が温存されている農村の姿がここにはある。地元農民／開拓団という対立だけでなく、地主／小作農、長男／二三男という農村内部の亀裂も描くことで、安部は「民主日本建設」を目指す「日本国民」の物語を否定してみせる。

こうした状況下で、第二部の終盤、引揚げの際に両親を失い孤児となった少年が、村の子供たちから暴力を受ける事件が発

生ずる。この事件をきっかけに、静的であった農村の権力構造にひびが生じるようになる。開拓団の組合長である堀は、青年団に以下のように呼びかける。

私らはみんな、あんたらと同じ境遇じゃないか。なあ、あんたらと同じく、百姓の二三男坊だ。それが、増産々々というわけで、いい具合に満洲に開拓に送られてよ、それが、敗戦で、半分以下の人間に減って帰ってきたんですわなあ。たとえば、この子はみなし児じゃが、この子の父親も農家の三男坊主だった。見てやってくれ、十年前のあんたらが、十年後に残したみなし児ですわ。(三二九頁)

耕地を与えられないために過剰人口として問題視される「百姓の二、三男坊」として、開拓団と青年会の共通点が強調される。開拓民と青年団とが団結した「開拓村」は、従来の農村共同体にかわる新たな共同体として出現したのである。日本社会から周縁化された人々の連帯により確立された開拓村は「電線がかかり、トラックが通れる橋がかかり、一日に一度赤い自転車をふんで郵便配達夫が往復する」(三〇五頁)ほどにまで発展するのだが、それは敗戦と占領により遂行された公的な「戦後」ではなく、そこから放逐された人々が自らの手で獲得した「戦後」である。その成功のイメージが描かれながら、第二部は幕を閉じている。

満洲開拓移民の加害責任をめぐって

以上みてきたように、『開拓村』第一部と第二部では、戦前・戦後を通じて国策により周縁化された人々の苦闘を通じ、「民主日本建設」という公的な「戦後十年」への問い直しがなされている。祖国日本への帰還という形式で引揚げを語ろうとする「帰郷」の物語は、敗戦により動揺した日本のナショナリズムの再興に寄与するものであった。これに対し、「帰郷」出来なかった引揚者として戦後開拓者を取り上げた『開拓村』は、ナショナリズムに回収されない形で引揚げを語る可能性を追求した作品として位置づけることができるのである。

ただし、『開拓村』が先行する引揚げの語りと全く対照的な位置にあるというわけでもない。「帰郷」の物語では引揚げに先行する植民行為は殆ど語られないという特徴があるが、『開拓村』もまた、一九三七年から一九四七年までの十年間、つまり開拓団の人々の満洲体験については全く描いていないのである。そのため植民者であったという彼等の過去は意識されず、その複雑な加害／被害の関係性は捨象されており、団員たちはいわば純然な被害者として位置づけられる。それは引揚げ時に遭遇した暴力を強調することで、引揚者たちを単純な被害者として描いてしまう「帰郷」の物語と本質的には変わらない。

ただ、ほぼ同じ時期、安部は自身の満洲体験についてこうも

書いている。

私が育った奉天というところは、あの殺風景な満州の中で
もとくに殺風景な町である。(中略) それでも、その殺風景
さにかえって心ひかれるとしたら、それはやはり故郷であ
るためだろうか。たしかに、故郷に準ずる町ではある。し
かし、故郷であると断言できないのはなぜだろう。私の父
は個人的には平和な市民であった。しかし日本人の全体は
武装した侵略移民だった。たぶん、そのせいで、私たちは
奉天を故郷と名乗る資格をもたないのだ。⁽²⁷⁾

たとえ「個人的には平和な市民であった」としても、「武装
した侵略移民」である「日本人」の一員として、そこには負わ
なければならぬ責任が存在することを安部は認識していた。
にもかかわらず、『開拓村』では開拓移民たちの行為が問われ
ることはなかった。では何故、安部は開拓団の満洲体験を描こ
うとはしなかったのか。ここには、当時の安部が農村の封建性
に対し強い関心を抱いていたことが関わっている。

一九五〇年代半ばまでは、安部は封建性の問題をそれほどは
重視しておらず、そのために岩上順一からは「今後諷刺の対象
をファシズムや軍国主義ばかりでなく、労働者農民をとりかこ
む社会環境のなかの封建的な残存物にさしむけ」るべきでは
ないかという指摘も受けていた。⁽²⁸⁾ その認識を安部が改めたの

は、松川事件の取材で訪れた福島県の農村での体験である。人
身売買を道徳的な悪とは認識しない農村の人々との意識の違い
に「自分が何という観念的なヒューマニストであつたかを痛感
した」安部は、次のように述べている。

村という長い間の封建的な共同体の生活の中では、まづ
たこの個人的な動きというものは存在しないのであつて、
体面ということが、一番のいつもつきまとう問題となつて
いる。人身売買をしてもそれは村八分の原因とはならない
が、それが新聞にでると、それはもう完全に村八分の理由
となるのだ。／このような状態の中では、基本的な人権をい
くら云々しても農民はけつしてうけつけない。やはり農村
の慢性的な貧困化問題とか、山林や土地所有の根本的問題
から農民問題をとりあげていかなければ解決のつかない問
題だとあらためて考えたわけである。⁽²⁹⁾

ここで安部が指摘しているのは、自由な個人というものが成
立しない、それを許さない農村の封建的構造である。この取材
の経験をもとにして、安部は「死んだ娘が歌った……」(『文学
界』一九五四年五月)という小説を書いている。貧しい村の少女
を語り手とするこの小説では、抑圧された人間の行為は「自由
意志」に基づくものなのか、その責任を問うことは可能か、と
いう問題が問われている。少女は家族を養うために劣悪な条件

の工場で働いていたのだが、一時帰休にあい、その仕事すらも失ってしまう。途方に暮れた彼女は工場の寮長にどうにか東京での仕事を斡旋されるが、待ち受けていたのは売春の強要だった。彼女は何か拒否するものの、結局それ以外に収入を得る手段はなく、追い詰められた末に自殺を選択する。東京へ出るか否か、売春を許容するか否か、そして自殺するか否か、は全て「自由意志」という語で処理されているのが特徴だが、では、彼女にとってそのようなものはありえたのか。少女は「自由意志」についてこう呟いている。

その晩私は逃げて帰ろうかと思いました。主人が恐かったのではありません。自由意志が恐かったのです。でも町は海のように、私は迷ってしまうにちがいないのです。泳いでも、泳いでも、向う岸にゆきつけず、私はおぼれてしまうにちがいないのです。行きついたらと思つても、それは岸ではなくまたべつの海かもしれないのです。／町も海、駅のプラットフォームも海、汽車も海、工場も海、そしてきつと私の家も海……(中略)海は町から私の部屋にまで入りこんできました。私は、自由意志で、おぼれてしまいました。「私が変わるかつたんじやないものね」、といいながら、私は私の死体の顔をなでつづけました。³⁰⁾

「私は、自由意志で、おぼれてしまいました」とあるように、

貧困により選択の余地を与えられていない少女にとって、そこに本来の意味での「自由意志」などは存在しない。それゆえ、自身の行為に責任を感じることはなく、「私が変わるかつたんじやないものね」と呟くのである。「強要」された「自由意志」という矛盾、そこに本当の意味での主体性・個人は存在しない。少女の行為を「自由意志」に基づくものとし、その責任を問うことは、彼女を追い詰めた構造的な暴力を不問に付すことと同義である。「ヘキ地」「隅っこ」へと追いやられ、「こうしなきや、生きていけなかった」開拓団の人々もやはり「自由意志」とは無縁であり、その点では「死んだ娘が歌った……」の少女と共通している。安部が開拓団の過去を描かず、その加害性を問わなかったのは、周縁化された人々は、自らの行為に責任を持つことが可能なのか、という問題が関係している。ただそこでは、結果として加害の側に立たされた、という複雑な問題は捨象されてしまうことになり、植民される側からの視点を決定的に欠くこととなった。開拓地を「ヘキ地」「隅っこ」とする枠組みは結局はナショナルなものでしかない以上、この作品は当初からそうした限界を抱えこまざるを得なかったのである。

しかし、こうした限界はあつたにせよ、引揚げという経験を「帰郷」の枠組みから解放放とうとした安部の試みは評価する必要があるだろう。戦後日本の引揚げを第二次世界大戦により引き起こされた大規模な人口移動Ⅱ「難民」化の文脈で捉えるべきとする道場親信は、以下のように書いている。

「難民」の流れは、その後もさまざまな形で暴力の連鎖によつて生み出されていった。「日本難民」はその連鎖の中に位置づけられなければならない。と同時に、彼らが「難民」となる前には、自らが「難民」を作り出す存在であった、ということを通り越して考えることはできない。敗戦による「難民」化、すなわち「被害者」化としてとらえ、それが「日本人の日本」に「帰還」して「平和」を得た、というような、平板な「国民史」に閉じ込めないこと。「帰還」した「日本」は決して彼らを「難民」から救い出すものではなかったのだということ。彼らは何度でも「難民」化するだろうということ。⁽³¹⁾

満洲開拓と戦後開拓という二度の「棄民」となった人々を描いた『開拓村』が明らかにしたものは、まさに「日本」は決して彼らを「難民」から救い出すものではなかった、「彼らは何度でも「難民」化する」ということに他ならない。そして『開拓村』で見出された、「帰郷」とはならない引揚げというモチーフはその後、『けものたちは故郷をめざす』（一九五七年）に受け継がれており、満洲体験・引揚体験に対する安部の認識を考へる上でも、『開拓村』という作品は重要な位置を占めている。

注

- (1) 「開拓村の苦心」『朝日新聞』一九五五年九月八日朝刊、五頁。
- (2) 普及率や契約件数は日本放送協会編『NHK年鑑 1957』日本放送出版協会、一九五六年、四四四頁、に拠る。
- (3) 大林清「大衆小説と放送劇―大衆放送劇について―」『放送文化』一九五二年八月。
- (4) 内村直也「放送芸術の確立へ」『放送文化』一九五五年一月。
- (5) 岡原都『戦後日本のメディアと社会教育―婦人の時間』の放送から「NHK婦人学級」の集団学習まで』福村出版、二〇〇九年、三一頁。
- (6) 日本放送協会編『NHK年鑑 1955』財団法人ラジオサーピスセンター、一九五四年、九一・九二頁。
- (7) 農地改革資料編纂委員会編『農地改革資料集成』第一六巻、財団法人農政調査会、一九八二年、九六六頁。
- (8) 厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』厚生省、一九七七年、二〇頁。
- (9) 成田龍一「引揚げ」に関する序章』『思想』二〇〇三年一月。
- (10) 前掲成田龍一「引揚げ」に関する序章。
- (11) ちなみにこの本には元満洲国開拓総局長東満総省省長五十子巻三の序文が寄せられているが、そこでは引揚げの途上に亡くなった人々が「開拓の英霊」と位置づけられている。
- (12) 藤原てい「呼べどこたえず」池田佑編『改訂縮刷決定版 秘録大東亜戦史 満洲篇』富士書苑、一九五四年、二六八頁。
- (13) 引用は『海外引揚関係史料集成（国内編）』第一六巻 ゆまに書房、二〇〇一年に拠る。
- (14) 成田龍一『戦争経験』の戦後史』岩波書店、二〇一〇年、九八頁。

(15) 蘭信三『満州移民』の歴史社会学』行路社、一九九四年、四五頁。

(16) 拓務省拓務局編『満洲移民第一期計画実施要領』拓務省拓務局、一九三七年五月。

(17) 前掲拓務省拓務局編『満洲移民第一期計画実施要領』。

(18) 前掲蘭信三『満州移民』の歴史社会学』、五七頁。

(19) 引用は、農地改革資料編纂委員会編『農地改革資料集成』第一六卷、財団法人農政調査会、一九八二年、四三五頁。

(20) 「昭和21年度開拓増産隊ニ関スル件」。引用は開拓20周年記念事業会内戦後開拓史編纂委員会編『戦後開拓史（資料編）』全国開拓農業協同組合連合会、一九六八年に拠る。

(21) 道場親信「戦後開拓と農民闘争」『現代思想』二〇〇二年一月。

(22) 野添憲治『開拓農民の記録 農政のひずみを負って』日本放送出版協会、一九七六年、一二七頁。

(23) 引用は、前掲開拓20周年記念事業会内戦後開拓史編纂委員会編『戦後開拓史（資料編）』、一五頁。

(24) 前掲野添憲治『開拓農民の記録 農政のひずみを負って』、一四一頁。

(25) 前掲蘭信三『満州移民』の歴史社会学』、一九五頁。

(26) 葛西嘉隆「農村二、三男問題の推移と現況」『職業安定広報』一九五三年五月。

(27) 安部公房「奉天——あの山あの川」『日本経済新聞』一九五五年一月六日。

(28) 岩上順一「創作方法と国民文学」民主主義科学者協会・芸術部会編『これからの文学 国民文学論』厚文社、一九五三年、一三五頁。

(29) 安部公房「常識と違う農村意識 都市の孤立性と通ずる封建制」『一橋新聞』一九五四年五月一〇日。

(30) 安部公房「死んだ娘が歌った……」『文学界』一九五四年五月。

(31) 前掲道場親信「戦後開拓と農民闘争」。